認知症患者の維持透析導入と継続に関する意思決定支援に対する看護師の葛藤

寺内良夫[1]　生田明子[1]　川北真弓[1]　佐伯千秋[2]

大阪府済生会中津病院　中11階病棟[1]　13階病棟[2]

はじめに

2016年度の透析導入患者の中で，75歳以上の後期高齢者の内訳は，女性では47.2%，男性は37.3%であり，高齢化が進んでいる。透析患者における認知症の有病率は，一般人口調査結果と比較して高く，約3倍に達している。日本では透析の長期化や患者の高齢化，糖尿病性腎症による透析人口が急激に増加したことに伴い，認知症患者（以下，患者とする）が増加している。A病棟では，患者の維持透析導入の開始と，継続に関する意思決定の場面に関わることが多くなっている。認知症が悪化する前に患者が透析導入を希望していなくても，家族の意向で維持透析導入や，継続を選択している場面に遭遇することが増えてきている。

そのような中で私達は，患者がその人らしく生きることを支えるために，患者家族に対してどのように介入をすることが望ましいのか，患者が望まない治療をうけることに関して，日々悩みながらケアを行っている。そこで，これらの葛藤の内容や対象方法を調査し，今後の患者との向き合い方についてあきらかにしたいと考えた。

Ⅰ．目的

認知症患者の透析導入・維持透析の経験がある看護師のケアに対する葛藤内容と対処行動を明らかにし，患者が“その人らしく生きる”ために看護師として何ができるのか，今後の患者との向き合い方について明らかにする。

Ⅱ．研究方法

1）研究デザイン：質的記述的研究

2）対象：A病院の透析看護に1年以上従事している病棟看護師の中，それぞれの経験年数より1名ずつランダムに選出し，同意を得られた看護師7名

3）データ収集期間：平成30年8月27日～10月8日

4）インタビュー調査（半構造的面接）の内容

① 患者の維持透析の継続や透析導入に関しての葛藤と自己の対処行動

② 患者に対しどのような考えの元にケアを行ったのか

5）分析方法：

研究協力者の許可を得て録音し，許可を得られない場合はメモを取った。録音した面接内容を逐語録に転記し，カテゴリー化した。真実性を担保するため，研究者4名で，合意が得られるまで協議した

6）倫理的配慮

研究に先立ち，研究計画についてA病院の看護部倫理審査委員会で承認を得た

Ⅲ．結果

研究参加者は7名。面談内容から，121のコードより共通の意味を持つコードを集めてカテゴリー化した結果，最終的に9個のカテゴリーが抽出され，3つのグループに分けることができた（表1）。1つ目は「看護師の認知症患者の透析導入に対する葛藤」。カテゴリーは【本人の意思ではなく家族や医療者に委ねられる命の行方】【本人の意思を尊重して透析導入する・しないと決定した後の予後や命の重さ】【嫌だと意思を示す患者に，抑制してまで透析しているときの無力感】【家族の辛さを看護師として共に背負うことができない弱さ】の4個が抽出された（表2）2つ目は「看護師が考える認知症患者の透析療法」。カテゴリーは【抑制することに対して治療のためと割り切った関わりの必要性】【看護師だけでなく医療チームで情報を共有し，患者の希望の見出す】【患者と家族の意向を確認し，その人らしく生きるために必要な価値観】【患者が将来像を見つめ透析を受容し，病気と向き合えるような関わり】の4個が抽出された（表3）。3

受付け：令和2年5月3日

つ目は「看護師の認知症患者への支援」。カテゴリーは【透析をしながら充実した生活を送れるように患者・家族に介護サービスの情報提供や調整】が抽出された（表4）。（【 】はカテゴリー）

表1．グループ分け

グループ	カテゴリー
看護師の認知症患者の透析導入に対する葛藤	本人の意思ではなく家族や医療者に委ねられる命の行方
	本人の意思を尊重して透析導入する・しないと決定した後の予後や命の重さ
	嫌だと意思を示す患者に，抑制してまで透析しているときの無力感
	家族の辛さを看護師として共に背負うことができない弱さ
認知症患者の透析療法中の関わり	抑制することに対して治療のためと割り切った関わりの必要性
	看護師だけでなく医療チームで情報共有し,患者の希望を見出す
	患者と家族の意向を確認し,その人らしく生きるために必要な価値観
	患者が将来像を見つめ透析を受容し,病気と向き合えるような関わり
透析療法を受けている認知症患者への支援	透析をしながら充実した生活を送れるように患者・家族に介護サービスの情報提供や調整

表2．看護師の認知症患者の透析導入に対する葛藤

カテゴリー	サブカテゴリー
本人の意思ではなく家族や医療者に委ねられる命の行方	患者が自己で透析を受けるか意思決定できない状況
	本人が意思決定しても，途中から家族の意思が優先されることの戸惑い
	透析導入する選択への理解が不十分であり，治療の選択を主治医に任せる家族もいる
	看護師が透析をしないという選択を促すのは意見を押し付けることになる
本人の意思を尊重して透析導入する・しないと決定した後の予後や命の重さ	面談を再度設定し，透析導入しないという患者の意思が通っても看護師は複雑な思いを抱える
	納得し抑制や鎮静をしながら透析をする姿をみて，ここまでして長生きすることが本人のためなのか疑問
	透析をしないという最期を迎えたいと選択した患者への介入
嫌だと意思を示す患者に，抑制してまで透析しているときの無力感	抑制しながら透析をしている時，暴れることで「嫌だ」という意思表示する患者の姿をみながら実践する時
	患者が抑制を必死に拒否している姿を見て可哀想と思い，看護師として無力感を感じた時
	抑制しながら透析をする患者の姿から自分の家族だったら「こんなしんどいことしない。」と考えながら実践している自分に気づいた時
	看護師の立場では自分の家族が認知症で透析が必要となっても暴れるようなら中断します
	採血結果で透析回数を減らすことは現実的に困難である
家族の辛さを看護師として共に背負うことができない弱さ	透析をしないと決めた家族は泣いていたが気持ちを聞けていない
	透析を継続せず，看取りを選択した家族もいる
	透析を中断すると尿毒症症状や心不全が出現するリスクがある
	患者の家族は透析を中断すると漠然と死んでしまうイメージがあるため生きていてほしいと願う
	家族は透析するかどうかがその人の命を決めることになるから辛い決断をしないといけない

表３．認知症患者の透析療法中の関わり

カテゴリー	サブカテゴリー
抑制することに対して治療のためと割り切った関わりの必要性	抑制されている患者に対し辛いと感じたが，スタッフと話し合うことをしなかった
	看護師は暴れながら透析をする患者を見て治療のためには必要であると考え割り切って看護する
看護師だけでなく医療チームで情報を共有し，患者の希望を見出す	透析すると一度決めてもその都度患者と家族の揺らぐ気持ちを受け止め主治医や看護師間でカンファレンスを行う必要がある
	認知症患者だからすぐに鎮静をかけるのではなく対応を上司に相談した
	認知症患者の意思決定に対して看護師，医師だけではなく認知症サポートチームに相談するべきである
	患者の思いや希望を尊重しながらチームで支えていき希望を見いだせる関わりが必要がある
患者と家族の意向を確認し，その人らしく生きるために必要な価値観	認知症患者でも面談を行い，家族の説得で納得すれば透析導入することも必要だと思う
	透析をせず今まで通りの生活を継続することで穏やかに過ごすことがその人らしさに繋がる
	認知症患者や家族からコミュニケーションを取り治療に対する希望を確認する
	看護師は患者が苦痛を軽減し，その人らしく生きていてほしいと考えている
患者が将来像を見つめ透析を受容し病気と向き合えるような関わり	患者が病気と向き合えるように看護師は患者の希望や思いを汲み取りながら関わる
	看護師は患者の将来の自分像や透析導入を受容できるように関わる
	透析をして元気になるなら認知症の程度にもよるが透析導入した方がいい

表４．透析療法を受けている認知症患者への支援

カテゴリー	サブカテゴリー
透析をしながら充実した生活が送れるように患者・家族に介護サービスの情報提供や調整	透析しながらも充実した生活を送っている人がいることを情報提供
	理解しやすい言葉を選択して治療により症状が改善することを伝える
	患者の透析クリニックのサポートや介護サービスを導入と調整
	家族の介護負担や精神的な疲労に対してのサポート

Ⅳ．考察

患者の透析看護に関わる看護師は，【本人の意思を尊重して透析導入する・しないと決定した後の予後や命の重さ】【嫌だと意思を示す患者に，抑制してまで透析している時の無力感】を抱いていた。どの看護師も現場では，これで良いのかというやり場のない患者への思いと現実との間で葛藤を繰り返しながら【患者が将来像を見つめ透析を受容し，病気と向き合えるような関わり】や【看護師だけでなく医療チームで情報共有し，患者の希望を見出す】ことができないかと考え行動していた。今後，増え続けるであろう患者の透析導入や維持透析の継続に関する意思決定支援については，医師と看護師間だけではなく多職種と連携し，【透析をしながら充実した生活を送れるように患者・家族に介護サービスの情報提供や調整】を行うことが重要である。そのためには，看護師は，患者が自分の意思が伝えられる時に，患者・家族・医療チーム間で，医療・ケアの方針について話し合いを繰り返すことが求められる。その意思決定支援ができれば，患者の尊厳を守りつつ，その人らしく生きることを支え，強いては看護師の看護の無力感や葛藤が軽減するのではないかと考える。

Ⅴ．結論

看護師は患者の意思を尊重したいと考えるが治療状況や家族の考えを優先しなければいけない場面が多く，葛藤を抱いている。今回の研究から認知症のある患者が透析を選択する・しないにかかわらず，病気を抱えその人らしく生きるためには話し合いを繰り返していくことが大切だと感じた。今後は看護師の葛藤を乗り越えるために，本人，家族，多職種間で思いを共有しチームで意思決定支援をいくことが重要である。

文　献

１）図説　わが国の慢性透析療法の現況，2016年12月31日現在，日本透析医学会，15
２）西村勝治：認知症，腎と透析，2019，819-822